
ぱっどらっくぐっどらっく。

おむざく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ばつどらつくぐつどらつく。

【Nコード】

N1807Y

【作者名】

おむざく

【あらすじ】

どうもこの世界には魔法だのなんだのとかいうものがあるらしい。少女は少年に出会い、それを知る。いいや、正しくは思い返す。だからといって平凡なようなそうでもないような女子高生になにか思うところがあるワケでもないのだけれど——どうも“運”はそれを許してはくれないらしい。

夏のその日、静かに日常が動きだす。

……とかなんとか言ってみたりして。

ぶろろーぐ。

峰高い山の麓を汽車が行く。

線路の脇に聳え立つ山々は人間を拒むように厳かで険しい。その雄々しさ猛々しさ、言葉に言い表すのならば莊嚴華麗の一語に尽きる。一目見れば穢れた魂を打ち砕くだろうその峰々。彼らの勇猛さに疎みながら、汽車は逃げるように広大な平原を走り続ける。

一人たりとも乗客の居ない、やけに広々として感じる車両の中。一人寂しく対面座席の片隅に座り、汽車の窓から極上たる景色を眺め、しかし男はぼんやりと溜め息を吐いた。彼の瞳に映るのは、そんな自然の壮大さではなく、

「——『魔法』、か」

ほんの数時間前に目にした、この世のモノとは思えない技術の粋だった。

剃り残しのアゴヒゲを指先で撫でつつ、しかし男はそれすらも意識に無い。ただただその視界は過去の時間に奪い去られたままである。

——天を焼き焦がすような灼熱を身に纏った、太陽の化身じみた不死の鳥を見た。

総身に雷を宿し、光よりも疾く翔ける、心優しき猛虎を見た。
国一つを揺るがす地震をあくび混じりに呼び起こす、災厄の龜を見た。

世界の天候を気ままに操り、人間の言葉を繰る気高き蒼き龍を見

た。

——そして。

粘土でもこねるかのように容易く、指先一つで彼らを生み出した、わずかに三歳の幼子を見た。

「……………」

背筋がぞくりと粟立った。

すべては幼子——彼のほんのお遊びに過ぎない。そう、すべてはお遊びだ。

男が彼に昔耳にした四神の存在を気まぐれで教え、彼はそれを“想像”出来たが故に“創造”した。

これが、この出来事が、どれだけの大事なのか。

「前、よろしいですか？」

「え——あ、ああハイ、どうぞ」

どうやら意識を外に逃がしすぎたらしい。ふと気付けば、男が座る席の横に見知らぬ青年が立っていた。

背の高い、柔和な表情を浮かべた若い青年だった。そのせいか、頭部に生える寒々しい銀髪がまるで印象に馴染んでいない。男の背は180ほどだが、それよりも更に大きく見える。まさか2メートル以上ということもあるまいが、そう言われればそうなのかと信じてしまえるくらいに大きい。

が、そんな外見よりも更に目に付いてしまったモノがある。男は舌打ちを我慢しながら青年の着席を見守った。

……やっぱりなア。

「旅はどうですか」

首から下をすっぽり包む分厚い黒いコート。

日に照らされることを避けるのはこの地域の常套だが、それでもこれはやりすぎだ。

これから向かう先、サハラの気温は更に高い。それも夏という時候を考えれば、青年の格好はまるで常識に外れていて、冗談のようですらある。しかし彼らには、常人の理解を超える狂気じみた約定があった。

「そうだねえ、中々良いモンだよ。故郷に妻と娘を残しているんでね、それだけが少しばかり心配ではあるが」

「そうですか」

視線は合わせない。

既に何度かその瞳は見たことがあるので、今更興味も無い。男にとっては随分と縁深い、もはや見るだけで吐き気すらもよおすその瞳。

「……だったんだけどなー。やっぱり、こうなるか」

「ええ、こうなりますとも」

渋い顔をして見せる男に、青年はにこりと笑いかける。男がようやく見据えたその瞳には、くつきりとした“逆十字”。

「で、なんだったつけか。お前さんは“ドコ”のどなただい？」

「『魔術結社』の者です」

「——あ、なーんだ」

青年の一言に、男は一気に緊張を解いた。脱力し、背もたれに体重の全部を任せるような勢いでだらりと倒れこむ。

「……その反応、少しいただけませんね」

青年の表情は変わらない。仮面のように笑みを作ったままだ。しかし、その声からは先ほどまでの親しみは消え、代わりに白刃じみた鋭利さが含まれた。

「貴方ならばお分かりでしょう、キシマ教授。今貴方がどういう状況に置かれているのか」

「そらそーよ。でもなー。お前さんみたいな若造送って来ちゃうよーな弱小だしなー。タカが知れてるってゆーかー」

完璧にナメきった態度で男——キシマはだらだらと間延びした声で答えた。背もたれに後頭部を任せて天井を見上げ、視線もやらずに胸ポケットから取り出した煙草に火を点けた。手馴れたモノである。

「今ここで殺してやってもいいんだぞ、オッサン」

どうやら短気で見境が無いらしい。キシマの挑発に見事に乗った青年が、顔から笑みを消し去った。

「はン、どうせハナっからそのつもりなんだろ？」

ミエミエデース。これっぽっちもやる気を見せないキシマの姿に、青年はようやく落ち着きを取り戻した。作り物めいた笑みこそ戻らないものの、瞳に真剣さが宿る。

「……コホン。いいえ、今日は貴方を殺しにきたワケではありません。『交渉』に参ったのです」

「……………ふん？」

咳払いをし、居住まいを正す青年。キリシマはようやくと興味を抱いた。ヘエ、力押し以外になんかあったりするのかい、こいつら。

「『魔法使い』に関する情報をいただきたい」

「却下」

「な——！？」

青年の言葉を一刀両断に伏すキリシマ。

青年がその言葉を告げた瞬間に、キリシマの態度が一変した。

「却下だよ却下。お話にならない」

キリシマは突然立ち上がると、座席の天井に備え付けの収納棚から大きなリュックを取り出した。果然とする青年を尻目に、リュックから取り出した衣服を素早く着付けだす。

カウボーイよろしく縁の広いハット。なにが仕込まれているのか分からない分厚いベスト。これではまるで西部劇の警官——否、世界に名高い冒険家兼考古学者のそれだ。

「おい、待てよ！ 交渉だって言っただろ！？ いいか、おまえの家族の命は今俺達が握ってる。そいつらの命が惜しけりゃ——」

「あーあーあーあー。もうそろそろそのきつたねエ口閉じとけよ、な？ ドサンピン」

矢も盾もたまらずとばかりに立ち上がり、険しい口調で叫ぶ青年。

どうやらこつちが本性であるらしい。実に若々しくて清々しいまでに悪役っぽい。……さすがに好感は持てないが。

「おまえさあ、交渉とか言っといてもうまるつきり恐喝になってんぞ？ その時点でお話になってねーじゃねーか。言葉と会話の流れをよく勉強して出直してこい。あ、もうそんな機会もねーっけ」
「……ッ！？」 おい、これが恐喝って分かってんだろ！？ 家族の命がいらねえってのかよオッサン！」

まるで取り合う気のないキリシマに、口角から泡を飛ばして青年が問いただす。が、キリシマはもはや憐れみすら浮かべて青年を見返すだけだ。

「おまえが情報の交換を断つたらずぐにでも日本の仲間に連絡がいく手筈になってる！ おまえの命もここで絶てって言われてる！ いいか？ この汽車は最初っから罠で——」
「知ってるよ、ボケナス」

「だから乗り込んだんじゃねーか」とキリシマ。青年は今度こそ混乱し、もはや言葉すら忘れて目の前の男を見つめた。

「こんなくっだらねー罠俺が気付かねーとでもホントに思ってたんかよ、ばっかでー。日に何度も働けない超重要交通機関に俺一人以外乗車しないなんて時点でフツーに気付くわ。ついでに、おまえらは色々俺を——俺達を知らなすぎだバカ。優しい俺が簡単に教えてあげちゃおう。」

——おまえは手を出す相手を間違えた。

俺だけだったらまだ良かったんだけどなア。よりにもよってその

家族、ときたんだよ。“よりによつて”、だ。

いいか？ おまえらは勘違いしたんだ。

強いのは俺じゃない。……いや俺だって弱かあないけど、その俺の何億倍も、俺のカミさんは強い。俺が尻に敷かれてんだから、おまえらなんか踏み潰されて痕も残らねえよバカ。

あとついでについて。俺余命一週間くらいしかないんだよね、出先で求婚してきた可愛い女の子の呪いで」

「……………！！！？？？」

準備が出来たとばかりにキリシマは再度座席にとつかりと座り込み、「モテる男はツライやーねー。子持ちだつったのになー」などとうそぶきながらエラそうに足を組んでみせた。口元にくわえていた煙草を吸い込み、一気に灰に還元してから、真つ白な煙を口から炎のように吐き出した。

「俺達の命を元手に賭けたおまえらの負けだぜ。チンカスすら残らねーと思え。いいかいボウズ。相手の命を奪おうって時やな、テメエの命を張るのが必定よ。

……そうでなきゃ、見合った成果は得られない」

「お、おまえ、一体……」

聞き及んではいたのだ。しかし青年は間違えた。決定的に。

自身の命の価値故に。

それすらを凌駕した価値観を持った人間の存在を、在り得ないと。

在り得ないワケがない。

この世に存在し得るモノは、この世で想像し得る何かなのだから。

——故に。

青年は、完璧に、間違えた。

「『魔法使い』のことは一つとして外部に漏らす気はねえんだな、俺あ。悪いが、愛しい愛しいカミさんと娘ちゃんにも、な。」

……あんなのをこの世に広めるワケにやーいかねえよ。アレは世界を狂わすドラッグ……いいや、プログラムみてえなモンだからよ。あんなのが“妙なカタチ”で世界に蔓延りでもしてみろオメー。俺の可愛い娘ちゃんの教育に悪いったらねーぜ。

だから、俺は残る命を以ってこの一件を完全に『無かった』ことにする」

ぼい、と煙草を放り投げ、

「悪いがボウズ、おまえも生かしちゃおけねえな。後の始末はカミさんが付けてくれるだろーけど、俺とおまえはココまでだ」

にやりと、ヒゲの濃い口元を禍々しく歪めて笑んでみせた。

「ふっ、ふざけたコト言ってんじゃ、——まさかオッサン、最初っからこうするつもりで……！？」

青年が“ようやっと”鈍く輝く鉛色の拳銃を懷から抜いて構えた時、

「あーあー。仮にも魔を扱う者がピストルって。ド三流すぎんだろいくらなんでも。だいたいオメー、セリフにも行動にも美学もロマンもこれっぽっちもねえじゃんよ。死ぬか生きるかの話してんだっていい加減理解したんだろ？」

……俺の遺体なんて残してみる、そこからえげつねえ手で色々引き出すのがてめえら『魔術師』じゃねーか。俺がそんな些細なミス犯すワケねーだろうが」

キリシマが、煙草に火を灯した瞬間から握っていたライターに、再度火を点けた。

「さ、楽しもうぜ坊主。長い永い旅路の始まりだ。行き着く先はちよおつと行ってみないと検証できないが、世界で最も有名な説によれば、翼の生えた美人とイイコトできっかもしんねえぞ？ やー、楽しみだ」

その火を、先ほど着込んだベストの内側へとゆっくりと近付けながら、

「お、おい、オッサン！ なにして——その懐にしまっている“モノ”はなんだアアああアアア！？」

青年はキリシマの思惑に気が付いたせいで引鉄も引けない。そんな無様を心から嘲笑しながらキリシマは、ゆっくりと口元を滑らせた。

「男の子だろ？ 騒ぐなよみっともねえ。こういう時は、
祈るしかないのさ。

『道往く貴方に幸あれかし』ってな具合にな」

その言葉と同時に、青年は、破滅の鐘の音を聞いた。

一話のいち。

海の果てを見ているようだ。

私の目の前で慟哭する彼女は、世界を絶叫で揺らしている。

——ああ。

ひどく、羨ましいと思った。

だつてきつと、彼女にとっての全てだつた。

それが喪われてしまったからには、この世界には何も無いのだ。
少なくとも、彼女には。

焦がれる胸と、それを理解できないでいる心。

きつと、私では彼女のそれに成り得ない。

彼女のそれはもうこの世に無いのだから。

……羨ましい。

憎悪はない。感謝もない。そんな感情を抱けるほどの記憶もない。
だから、憧れたのだと思う。

彼女の立ち位置は、きつと私にはつらすぎる。

望むだけ求めて、結局失い泣くのなら。どんな希望もいつかは悪
夢へと成り果てるのなら。

私は彼のように成りたいと思う。

——ああ、いつか。私も、

「青木」

淀んだ空気に満ちた室内に、そんな、行き遅れた三十二歳女教師が放つような呪いじみた声が響く。気味が悪いことこの上ない。

「有島」

四角い部屋に四角い窓。更には四角く並べられた四角い机達。おおよそ四十もの無機質な四角がこの室内を埋め尽くしている。そんな中、呪文に呼び寄せられるように、男女の区別すらなく一人一人絞首台へと向かうのだ。

まるで死刑判決——いいえ、正しく死刑執行。

……いや、ホンモノなんか見たことあるわけないのでイメージでしかないんだけど。

だけど、どういふことなのだろう。そんな厳しく苦しい判決を受けて、会心の笑みをニヤニヤと浮かべて戻ってくる者もちらほら。ああ憎らしい憎らしい。

「キシマ」

……………嗚呼。

神様仏様天使様キューピッド様。いいやもうなんだって。コックリさんだろうがデビルさんだろうがかまいやしないのだね。お願いだから、お願いだから、運を——あ、できれば幸運をですね。

「霧島ちゃん。霧島シズクちゃん。心優しく見目麗しい先生様

が呼びだつつつてんだろクラス最下位の霧島ちゃん。点数もバラしちゃうぞ〜」

「いっやあああああやめてやめてそれだけはらめえええええ!？」

机を放り投げる勢いで席を立ち、「なんだまたか」と言わんばかりの表情を浮かべる冷徹なるクラスメイトどもの脇を飛ぶように駆け抜けるワタクシ。

うつ、やっぱり運が悪かったみたい……。

その後あっさり授業も終わり、憎たらしい行き遅れが教室から堂々と去ったあたりで、私は溜め息を吐いて赤に塗れた答案用紙を睨みなおした。

「うぎぎ……」

これ以上ないってくらい堂々と、そこには一つの数字が存在を主張していた。

「いやア……さすがにちょっと、これは……」

叫び出したい衝動を噛み殺しながら大きな丸を見つめ、どうやって誤魔化そうかを模索する。だって、これは、ちょっと、

「うーわ。なにその点数。漫画以外で初めて見たんだけど」

「うわっ!」

集中しすぎて周囲に気を配るのを忘れてた。見事に友人——みーちゃんに見られたっばい。背中ほどもで伸びるポニーテールを元気に揺らしながら、私の答案を横から覗き込んでいやがった。

「……見た？」

「見た見た。スゴいね、答え合ってたのに解答欄全部ズレてるとか、これ神技って言っていていいんじゃない？ さすがに全部は見たことないわー」

「……その言い訳、うちのママンに通じると思う？」

「ムリだと思うなあ。シズクん家のお母さんどんな経過でも結果に繋がらないとスゴく怒るタイプじゃない、特にこういうケアレスミス」

「ですよー……」

ケラケラと笑顔でのたまうみーちゃん。ふふふ、こうまでガツクリきてる私を見てその太陽のように可愛らしくも輝かしい笑顔。まるで鬼神の如きだぜ。

「まーほら、追試でどうにかすれば補習受けなくて済むワケだし。いくらシズクの運が極端だからって、さすがにそこまで影響したりしないでしょ？」

「それは私じゃなくて天秤さんに聞いてほしいわあ……というか私が聞きたいわあ……」

ほんとーに。

結構ちゃんと見直したハズなんだけどなあ……解答自体は間違っていないんだから、やっぱりいつもの落差とみて間違いなさそうだね。

「いつも思うけどアンタってほんと極端よね。こないだなんかイイコトあった？」

「ん……先週、ママンの友達から私好みの服がいっぱい送られてきたから、多分それ」

「あちゃー。タイミング悪いねえ」

それ込みでじゃないかなーと思う。

「うふえ……」

今度こそ、私は机に突っ伏した。

いい加減この体質っていうか性質どうにかならないもんだろーか。……私以外のことから自信があるわけじゃないけど、それでも、きつと私より『運』というモノにメリハリがある人っていうのはそうっていないと思うのだね。

良いことがあった後に悪いこと、人生はその繰り返し。——なんていうのはまあ一般的な考え方なんだろうけど、私の場合はその落差がちよつと激しすぎるのだ。

極端な話、“凄く良いこと”があったら“とてつもなく悪いこと”が当たり前に起こる。経験則で言えば、ラッキーからラッキー、後にアンラッキーなんて連鎖はなく、ただただ交互に起こりくるのだ。

「ほら、元気出しなよ。テストがこうだったってことは、次にくるのはなんか良いことなんでしょ？」

「ん……多分」

未来のことは分らない。

今の今までがこうだったからきつと次も、なんていうのは、結局予知とか直感とかその程度でしかないし。うーん。

「あんまりネガティブな方に考えないの。ほら、もうすぐ夏休みじゃない。どこか遊びに行く計画でも立てようよ」

「あ、そうだねっ」

私は机にべったりとくっつけていたおでこを引っぱがすと、諸手を挙げて元気を出した。こんな不幸三秒で忘れ去ってくれるッ。

「どーしよつか。去年は山だったよね？」

そんな反応に気を良くしたのか、みーちゃんが嬉しそうにメモ帳をスカートから取り出した。

「……え、まだそれ使い切ってなかったの？」

「ううん？ どうせ今日はこの話になるだろうと思って、持ってきたの」

「あー、そらあそらあ」

準備のいいこつて。てゆうかこの場面デジャヴュ。

「そつといえ去年もこんなふうだったっけ？」

「よく覚えてるねえシズク。場所は一年生の教室だけど、やってることはな〜んにも変わってないよ」

ペラペラと自慢のメモ帳をめくるみーちゃん。彼女の趣味は毎日の出来事を事細かくメモに取ることである。なので普通の日記帳では物足りず、常から携行できる手の平サイズのメモ帳がベストなんだそーな。

……飽き性な私にや絶対マネできないだろーなー。

「変わりなし、か」

「うん、変わりなし」

「
……………」
「
……………」

なんととはなしに確認を取り、なんととはなしに察してくれたらしい
みーちゃんも口を閉じた。ついでにメモ帳も。

つまり、そう。

変わりなしということは、昨年二人で誓い合った約束も果たせて
いないことになる。

私は若干トーンダウンさせた声で彼女に囁くように問う。

「ねえみーちゃん」

「なんですかねシズクちゃん」

「そのメモ帳にはもちろん書いてありますのことよね」

「……………ありますのことですっねえ」

ふと気付けば逸らしていた視線を、ちら、とみーちゃんに送る。

みーちゃんもみーちゃんだと思うところがあつたらしく、ちよつと涙
目になりながらこつちを見た。

「彼氏……………どう？」

「シズクは……………？」

互いに言葉を交わし、同時に肩をすくめて見せる。鼻から漏れ出
た冷たい息は、いったいどんな絶望に塗れているというのか。

『できてるわきゃねーじゃないッ！！』

二人して叫ぶ。

「一瞬教室中の視線が集まった気もしたが、それも一瞬のこと。」
「なんだあいつらか」で済んでしまいうくらいにはこのクラスに馴染んだつもりではある。

「うつうつゝ〜なんでえ？　なんでこんなにモテないのよ私達い……」

「おかしいなあ……いや自惚れっつてのは分かってるんだけど、それでもシズクも私も平均並だと思っただけどなあ……」

頭を抱えて呻きあう。

くそつ。おかしい。実におかしいわ。だって容姿だけで言ったら決して悪くはないハズなのにっ。

「へいストップそこな前川くん」
「あー？」

うつん唸る私達を丸つきり無視して素通りしようとするクラスメイトAに声をかける。ええい、自分達の考えが合っていないなら第三者の意見を元に考慮すればいいだけの話であるっ。果てしなく迷惑そうな顔とかやる気のなさそうな声とかはこの際無視。

「私達の何がモテない要因になってると思う？」
「顔以外全部」

「――」

一刀両断にもほどがあるんじゃないでしょーか。
あまりの即答っぷりと内容に身じろぎ一つできないでいる私達に、
「美味しそうな饅頭の中身がカラシの塊だって分かってたら誰も手

に取りもしないだろーよ」と冷静すぎるご意見を一つ残し、クラスメイトAな前川くんは去っていった。

「……シズク」

「……どうするべきだと思つかね、みーちゃん」

「性格、改……善？」

「今からできると思う？」

「超めんどうかい」

「ですよー」

あっさりと認め、その提案を投げ捨てる。

「つまりっ!」

ばん! と私は勢いよく机を手の平で叩き、結論を下す。

「今年は二人で海!」

「しかないよねえ……」

はぁ、と悲痛な溜め息を放つみーちゃん。結局こうなるのはまあ分かってはいたのだけれど。しかし第三者のご意見が予想より鋭利すぎたというかハートブレイクショットだったというか。

「海だし、もしかしたらナンパとかあるかも知れないしね……ほら、見かけだけはいいかホザいてたし」

「そういう目的で海行くのはイヤだなあ……ひと夏のアバンチュールとかあんまり興味ないし」

「かといって山もねえ。去年どうなったか覚えてる？」

「メモ帳なんかなくなっちゃって忘れられないわよ……クマとの追いかけてこなんて」

「いや、アレはさすがに死を覚悟したなあ」

ちっちゃい時から緊急時のためについていう名目で逃げ足鍛えられてなかったら、最初の数秒でアウトだった気がしてしょうがありません。荷物の中の食料ぶち撒けて気を散らせた瞬間ほど食べ物に感謝した瞬間はなかったナ。

しかしまあ、去年の山キャンプは酷かった。安全圏ですって言われたキャンプ場に普通にクマが出るとかもうね。私の不運のせいなのは分かってはいるけど、さすがにああも簡単に命の灯火が揺らぐのはどーかと思う。

「そういえば部活は結局やらなかったのね」

「うーん、どうもね」

忘れてた、とみーちゃんが聞いてきた。クマからの脱走時に発揮した運動能力を部活にでも活かせばいい、とかなり強引に薦められたのだ。

たしかに一般人以上の性能を自覚してはいるけど、私としては穏やかで優しい心を持つだけでいいので、こう、激しい怒りに目覚めちゃう戦士という項目はいらねーのである。人間、安穩平穩が一番スわー。

「そこまで求めてないってば。普通にやってるだけで十分活躍できるクラスじゃない」

ケラケラと笑われる。最初こそ真剣だったものの、一年もすれば色々と理解に通じるものみたい。口ではそんなことを言っているけど、もう本気さは含まれていないように思える。

「だったとしたら余計にそんなことはできないよ。そりゃ少しくらい腕に覚えはあるけど、その程度の考えで真剣に打ち込んでる人達の邪魔はできないし」

もしも実際に私がこんな中途半端なやる気でなんらかの部活に参加したとして。もしかしたら現状の運動能力で活躍できたとしても。

……そのせいで、今まで努力してきた人達の邪魔になるようなことになったら、申し訳の一つもない。だから、やるなら最初から全力で。そう、スタートラインは、誰もが平等な入学初日からでなければならなかったのだ。途中参加で中途半端なマネなんてとてもとても。

「前を向いて努力する人達は好き。だけど、私がそうなれるとは思えないもの」
「そっか」

だから、この話はここまで。
これ以上は本気になってしまう。それを分かってくれているみーちゃんは、これ以上の追及は絶対にしてくれない。いい友達を持ったもんだ。

「おーい、仲西」
「なーにー？」

と。

唐突に廊下の方から男子の声がみーちゃんを呼んだ。あれはクラスメイトAこと前川くんじゃないか。なんか今日は妙にタイミングがよろしい。

「ちょっと行ってくるね」とみーちゃんは手を軽く振ると、テスト返却後のにわかに賑やかな教室から出て行った。

私の機嫌が悪い時に近付いてくる知り合いなんてみーちゃん以外にいないので、私は一人思索に耽る。うーん、どうしたものか。

テストの点数がこうということは、次に待ち受けるのはそれなりにハッピーなラッキーだろうことはまず間違いない。ただ問題は、それがどんなタイミングで訪れるかである。

「……はっ」

もしかしたら。ふと、随分とポジティブなシンキングがアイデアをクリエイトした。これはもしか、怒られないフラグではあるまいか——ッ！

そう、そうだ。

なにも、テストの点が悪いという不運が我が恐ろしきママンの怒りに直結するワケじゃあないんじゃないかな。だってほら、それはアレだ。いわゆる“それとこれとは別”ってヤツだ。

今この瞬間の不運。私にとっての“運”というものは単一であり、それがサイクルすることで成り立っている——と私は解釈しているのだ。

だとしたら。

思わず、口元にいやらしい笑みが広がってしまう。

でもしょうがない。これは、このタイミングは、実に珍しい『本当の不運回避コース』とでもいうべきものなのだからしてっ！

いゃん。あはは、思わずガッツポーズですよ！

そうと決まれば話は早い。

もう、なんかもう。なにか別の、幸運不運に左右されるような出来事に出会う前にさっさと帰ってこの答案用紙を見せつけるに限るっ！

幸いこの後に残っているのは帰りのHRだけだ。担任に見つからないうちにズラかろうと決意を固め、私は手早く鞆に教科書やらケ―タイヤらを放り込み――と、

「た、ただ、いま……」
「およ」

家に帰ったわけでもあるまいに。なんだか間の抜けた挨拶をしてくるみーちゃんに、作業の手を止められた。ええい、急いでるけどしょうがない。

「おかえり、結局なんだったあの呼び出し？」
「あ、え、と……その、えっ……と――」

むっ？

みーちゃんにしてはなんだかスゴく齒切れが悪い。つい急かし口調で訊いてしまったが、切羽詰っているのは私だけじゃなくてみーちゃんの方もっばい。

「ど、どうかした？ 前川くんになにかされた、とか？」

だったとしたらあのクラスメイト野郎ゆるさねー。輝けるフィンガーと名高いこの握力でそのおつむミシメシ言わせてやろう。と、そこまで考えておいてなんだが杞憂だったようだ。

みーちゃんはふるふると、まるでかわい乙女のような仕草で首を振った。……あれ？ なんか妙に可愛いつていうか可愛いぞみー

ちゃん？

「あの、その……ね？」

「う、うん……？」

「——っ、て」

「え？」

全然聞こえによい。わんもあわんもあと頼み、今度こそ耳を澄まして、蚊の鳴くように小さなその可愛らしい声を鼓膜に刻む。

「村山くん、『付き合ってくれ』……って。言われ……た、の」

「——むらやま、くん？ 村山くんって、隣のクラスなの？」

こくん、とうなずかれる。

「サッカー部のエースで主将で、超モツテモテのあの村山くん？ プロからスカウトきたって今旬の話題独占のあの村山くん？」

こくり。

「あ、あの、ね？ なんか、中学の頃から、ずっと、好きだった……って。ずうつと私だけを見てた、って。まだプロ入りが確定したわけじゃないからはつきり言えないけど、その……そうなるように、そうなった後も、ずっとそばで支えていてほしい、って」

「……………それ、って——」

もう、なんていうかアレじゃね？
プロポーズじゃね？

「え、えへへっ！ あ、でも、まだちゃんと返事してないのっ！
や、やっぱりその、将来とか関わってくるとなると、その、やっぱり私も嫁入り修行したほうがいいのかな、とか、いつか海外に行っちゃうかもしれないような人のお嫁さんってなると英語の勉強とかしなきゃかな、とか、その――」

しかも受ける気マンマンっばい。

私はみーちゃんの言葉をなんとか受け流しつつ把握して――
深く深く吐息した。

「ねえ、みーちゃん」

「な、なあに？」

「お幸せにいいいいいいいい！――！――」

村山のヤロー、みーちゃん泣かせたら絶対ぶっコロす。

一話のじ。

「さて、どうしたもんかしらん」

結局放課後まで残ることになってしまつて更に後。ほとんどの生徒が校舎から消えた頃合を見計らい、私はそつと校門付近までやつてきた。当然、誰かに出会つて運がぐらつくのを防ぐためである。部活の再開は明日からなので、いつもだったらグラウンドを血と汗と涙と青春で埋め尽くすやつらも残っていない。

「あつづ……」

額から流れ出した汗を腕で拭く。たしか朝の天気予報では最高気温は三十四度くらいだったつけ。今は午後の三時だし、そろそろ熱気も下がり調子のはずなのだわ。

テスト週間も終わり、じきに夏休み。本当だったらこの太陽さんの暑っ苦しい陽射しだつて祝福の光みたいに感じられたはずなのだけど、どうも今日はそういう気分にもなれないでいる。

一人は……独りは、ちよつと。

何事も、楽しんだり喜んだりする時は誰かと一緒の方が盛り上がるものだといふのに。いつもだったらその役目を買つて出してくれる親友たるみーちゃんは、白馬どころかそのうちヒコーキとか乗つて世界で活躍してしまいそうな超一級の王子様にさらわれてしまった。

「うつ……」

ああイヤだイヤだ。何がイヤつてそんな親友をちよつと、かなり、

けつこう、そうとう羨ましいと思っちゃってる自分がイヤだ。

ええい、ぼっち上等だとも。親友の幸福を素直に祝えないような人間になった覚えは手前さんにはありませんよ！

「……かえろ」

小さく呟いて歩き出す。歩き慣れた並木道。これまた四角い学校の敷地を包囲するように敷き詰められたこの街路樹は、なんとも分かりやすく全部が全部桜の樹である。入学式とかそういつた時期には惚れ惚れするほどの華々しさだけど、今は脳を揺さぶる金切り声を上げっぱなしのセミたちのアジトだ。陽射しに当たって緑葉が輝く様は綺麗だとも思っけど、今日ばかりはそんな気分でもないのだった。

「くそう、元気いいなア」

つい、と見上げる。

保護色になっているせいで見えないけど、きっとそこにはこの大合唱を我が世の春とばかりに楽しむセミ達が雁首そろえているのだろう。いいなあ活き活きしちゃってもう。

「キミ達、そんなに元気がありあまってんならちよつと私のために世界中の元気を集めてきてくれたりしてもいいんじゃないよ？」

「元気、ないのか？」

「ふえっ！？」

——と。

唐突に背後からかった声に心底びっくりして振り返る。え、ちよ、待つて。今のバカっぽい独り言聞かれたとか恥ずかしすぎる――！

「その、大丈夫、か？」

「え、ええ、と。うん……」

どう答えればいいんだか。

真っ白になった頭でなんとか応答文句をツギハギしながら、

「も、もしかして今の、き、聞い、聞いて……」

「うん？ ……ああ、うん」

ようやく、私は素直に返事を返す男の子を見た。制服はうちのだ。学年ごとに色の違うネクタイをしめていないので先輩か後輩か同級生かは判断できない。が、雰囲気からなんとなく同級生っぽいとアタリを付ける。どうも二年にはぼんやりとしたヤツが多い気がする。つまりまあ、ぼんやりとしたヤツに見える。

「……おまえ今失礼なこと考えたろ」

「い、いやいやそんな」

半眼で睨まれる。考えが顔にでも出てたらしい。

――っていうか、あの。

「じゃなくつて。えっと、あんだ……なに？」

聞き方を間違った気がしなくてもない。

「なについておまえこら。新田だよ新田。同学年どころか霧島と同じ

クラスなんだけど」

困ったように頬を指先でかく自称クラスメイトのニツタくん。

「……うーん？」

ヤバイ。正直な話、まったく見覚えがない。

人の顔を憶えるのは得意な方だけど、さすがにまるっきり接点のない人を記憶するのは難しい。クラス全体をいつも意識しているようなイインチョーでもあるまいに。

「……………」

「……………」

お互い黙り込む。ヒドく気まずいのでさっさと逃げ出したいとは思うものの、ヒドいのはどっちかっていうと私っぽい。このなれなれしさからして初対面というワケでもなさそうだし。

「えっと、なんかこう、行動を共にした事があつたりなかったり？」

「……はあ」

新田君はあやふやに疑問を口にする私に愛想を尽かしたように溜め息を吐き出すと、片手でおでこを押さえながら口を開いた。

「いや、まあ。確かにクラスが一緒になったのは初めてだし、話したのも学年上がった春休み明けの初日だけだよ」

「な、なーんだ、一回だけでしょ？ ほら、そんなのいくらクラスメイトだったって覚えてなくてもしょーがないっていうかー」

「……俺は一日たりとも忘れた事なんざなかったけどな」
「ぐっ」

「影が薄いのも自覚してっけどな……」
「うっ……ごめんなさい」

もう謝る以外でないせーというのか。さりげなくトドメをさしてしまつたらしく、「どうせどうせ」と呟く彼の姿が実に哀れに見えてしまふ。いや、悪いのは私なんだけども。

「もう、ゴメンってば。ちゃんと顔も声も覚えたから忘れないってね？」

なんとなく子供をあやすような口調になつてしまふ。むっ、このヒト苦手かも。

「……いや、悪い。こんな話をするつもりじゃなかったんだ」
「うん？」

口調こそ控えめだけど、なんだか顔色は戻った様子。新田くんは気を取り直すように頭を二度三度振って、私を見た。

……およ。ちゃんと向かいあつてみるとワリとイケメンじゃないか。髪型とかイジつてないから平凡っぽく見えるけど、改造したらきっとイイ感じになるとみた。

「えっと、あのっ」

直視されてるのが恥ずかしいらしく、顔を急激に赤く染めながら視線をそらしつつ。しかし言葉の勢いは止まらない。

「——あのっ！」
「は、ハイっ！」

セミ達に負けないぐらいの絶叫に思わず背筋を正してしまう。うう、なんなんだろうさっきから。やけに居心地が悪いぞー。

「あ、ああ、悪い、そうじゃなくって、ええ、と……その、霧島は、その、元気、……か？」

「……………はあ？」

しどろもどろに繋がった後に、そんな質問が飛んできた。いったいどういう流れでこんな会話に——あ。

「あ、あー、そっか。それでフリダシに戻るのね。ああ、はいはいはい」

「う……口ベタで悪い」

「いーよいーよ。ああ、そっかそっか。新田くんは元氣のない私を心配してくれてたってことでいいのね？」

「ああ、まあ……そういうことだ」

なんだ、イヤツじゃないか。

私の心の中であっさりと彼に対する苦手意識が氷解を始めた。そういえば話しかけてきたきっかけはそんなだったけね。

「あー……と、うん。そうだなあ」

「……………」

色々と泡を食ったせいかな、なんだか頭の中がスッキリしてしまっている。さっきまでは色々ともやもやが立ちこめていた気がするが、それも含めて全部どこかに消え去っていた。

「うん、大丈夫。元気になったよ。新田くんのおかげかな」

「え、……—えっ！ あ、それって、その、お、俺の、え、待
つてくれ。俺まだなんにもしてないのに」
「うん？ 大丈夫だってばさ。驚かされたりとかで色々と頭回して
るうちになんか、うん。……あは」

焦りに焦る新田くんの顔を見てたら、なんだかいつもの調子が戻
ってきた。

「そ、そうか。なら良かった」
「うん、ありがと」

ほう、と胸を撫で下ろす新田くん。なんとなく人間関係に免疫な
さそうなヤツだけど、きつと勇気があるのだろう。だってそうでな
きゃ、ほとんど初対面の、それも同級生の異性に声なんてかけない
だろうし。知り合いのチャラ男くんとかは別だけど。

「んー？」
「なんだ？」

そつえば。
もしも私の元気が無いままだったとして。

「新田くんは私を、どうやって元気づけてくれる気だったのかにや
ー？」

「ん——ああ」

なんとなく、聞いてみる。完全に気まぐれなんだけど、少しばか
りこのクラスメイトに興味が湧いてきた。あんまり関わったことの
ないタイプだ。

「遊びに誘ってくれたり、とか？」

私だったらそのぐらいしか思い浮かばない。カラオケとかウインドウショッピングとか、ともかく賑やかな場所で賑やかなことをするのが一番紛らわしになるし。

……ん、でも新田くんのキャラじゃないかな。見た感じ、ほぼ初対面の女の子にそんなことを言い出せるような男の子にも見えないし。というかそれって、実質デートみたいなモンだしね。

「いや。俺にそんな勇氣は、その……無い」
「だよー」

またしても恥ずかしそうに、頬を赤くしてうつむく新田くん。

「だから、その——霧島の願い事でも叶えてやろうと思って」

「……う、ん……？」

なんかいきなり発想がぶっ飛んだ気がしたんだけど、私の気のせいなんだろーか。

え、願い？ 叶える？

「えーと、それは、どこそこに行きたいなら一緒に行ってあげようとか、なにか欲しいモノでも買ってくれちゃったりとか、そういう？」

「あー」

「そういうのもアリだな」と新田くん。ということは、なにか別にやれることがあるとでも言っただろうか。

「だとしたって、ほとんど面識のない新田くんは無茶振りなんかでないよう」

「ん……そう、か？　ワリと、なんだっていいんだけど」

「ふーん……？」

なんでだろう、随分と自信ありげに平然と言ってくれる。……なんか違和感があるなあ。なんなんだろう。

「でも新田くん、そういうこと簡単に言っちゃダメなんだからね？」
「え？」

「今回は私だったからいいけど、もしもこんな調子で他の、それもワルいヒトにそんなこと言ったら、どんなお願いされるか分からないよ？　お金だせとか、なにかとんでもなく高いモノ買ってこいとか。そういうことを言い出すヒトだっているかもしれないし」

「む……そうか。それもそうだな、気をつける」

こくりとうなずいてみせる新田くん。うむ、素直でタイヘンよらしい。というかこんなの当たり前のことだと思っのでちゃんと認識しててほしい。

「そいじゃそろそろ行こっか。こんなトコでずーっと話してたら茹で上がっちゃうわ」

そこでようやく私は彼から視線を切って、並木道に視界を戻す。通学路だけあって、校舎に沿うように作られた道路にはこんな時間にも関わらず車の一台も見受けられない。周囲は学校を包むように住宅街が広がっている。道路沿いを歩いていけば、ものの五分で目当てのバス停にたどり着く。

「新田くんは帰り道一緒？　私は途中でバスに乗って駅まで行っち

やうけど」

「え、あ……も、もう、帰るのか？」

「うん。もう学校に用事もないからね。たまには歩きで駅まで行ってもいいけど、今日はちよつと暑すぎるし……」

カンカンとアスファルトやら私やらを焼き照らすお日さまを睨みつけようとしてやめた。ええい、早く秋になればいいのに。あ、でも夏休みは永遠に続いて欲し――

「――涼しければいいのか？」

「うん？」

とめどないどうでもいい思考を切り捨てるように、

「俺の今の家は学校と駅の間くらいだからその、良かったら、歩いて行かないか……？」

そんな、やたら切羽詰った声音と同時に、――

世界がそのカタチを変えた。

「あ、れ……？」

驚いて、周囲を見回す。

太陽は飽きることなく青春に燃えており、その熱に浮かされた道路はフワフワと陽炎を立ち上らせている。熱気に負けじと桜の樹は

緑葉を輝かせ、セミ達のオーケストラステージを盛り上げている。
何もかも変化はなく、聞こえるのは降るような蝉時雨だけ。私と
新田くんしか存在しない孤立した空間で、一人、私だけが――私の
周囲だけが変質した。

「え、ちょ。なに、これ」

「涼しくなったか？　じゃあその、良かったら途中まで一緒に……」
「じゃなくって！」

相も変わらずもじもじと話を続けようとする新田くん思わず待
ったをかけた。いやいやいや。おかしいおかしい。

「え、なにこれ。新田くん私になにかしたの？」

じわりと背筋に汗が伝う。決して暑さからくるモノじゃないと確
信できる。

なにしろ――さっきまでの暑さがウソのように消え去って
るんだから。

「ん。暑いのがイヤなんだろう？　今お前の周囲だけ気温を下げたん
だ。えっと、まだ暑かったりするか？　一応、冷房の設定温度を参
考に二十四度くらいにしたんだけど。あ、寒すぎるならもうちょっ
と変えようか」

「あー、じゃあ私寒がりだから二十六度くらいで」

「おっけ」

「あ、そうそうこんくらいで丁度いいわー。」

――じゃなくって！」

ぱちん、と指を軽く鳴らす新田くん。ついで、瞬時に私の周囲の空気が切り替わる。実に快適なだけけれど、重要なのはそこじゃないのだわ。

「なにこれなにこれ。え、どうなってるの？」

非常に快適なんだけれども非常に気持ちが悪い。自分だけがヘンなふうになされてる感じがしてとてつもなくキシヨい。

ぶんぶんと身振り手振りで不思議と違和感を表現する私を見て、新田くんがくすりと笑う。

「……おお」

今現在身を襲う不思議が吹っ飛ぶくらい、なんだかその笑顔に見惚れた。思い返せば、さっきの登場からこっち、ずーっとコイツは仏頂面だったのだわね。うわー、なにこれ可愛く見える。ギャップ萌えとかなんとかゆうやつだろーか。

「えっと、説明……しよつか？」

「なにを？」

「なにつて、だから、今霧島にかけた『魔法』のことを――」
「あー」

ホントに忘れきってどうするんだい私。言われてようやくと、自分の身の異変を思い出し、

「……『魔法』？」

「そ、魔法」

新田くんの発したメガトンな単語に思わず聞き返す。おや？
いつからこんなメルヘンてゆーかデンパな話題になったのかしら？

「その、本当は誰にも言っちゃいけないことなんだけど、霧島にならないかなって。俺、いわゆる魔法使ってやつでさ。この力使って霧島を元気にできないかな、とかその――」

はあ。と生返事。

「……………」

うーん、どうしたものか。
いつもの私なら間違いなくバイバイセンキューと颯爽と逃げ去る展開に会話なんだけれども。

「ん」

腕を軽く振って、やっぱりまだ感じる気温が涼しいままなのを確認してから、一応問いかける。

「ねえねえ新田くん」

「ん？」

……ぬう。なんかすごく笑顔が華やいでいる。

これはあれだろーか。自分の言いたいことがようやく伝えられたという喜びのせいと見て間違いないんだろうか。

「それじゃさ、これだけで魔法使いつて認めるのもなんか地味だし。こつ、景気良く一発、信じるしかないくらいにその……まほーとやらをかましてみてくれませんかね」

……くっ。魔法とかこう、漫画の話してる時ならいいけど、シラフな会話してる時に口に出すとヒドく恥ずかしい……っ！

「？ いいけど………どんなのがいい？」

「えー、そのぐらい自分で決めてよ。魔法なんて手品とは比較にならない大言吐いたんだから、アッと言わせてくれると嬉しいかな」

「ふむ……よし」

「おっ」

なにを見せてくれるのか決めたらしい。自信ありげにうなずくと、新田くんはくるりと私に背を向け、

「こんなんでもーだ」

「——っうわ」

ぱちん、と。

腕を鞭みたいにしなやかに振るって——不覚にもときめいてしまっくらい格好良く、指を弾いてみせた。

刹那、咲き誇る——奇跡。

「信じてくれたかな？」

「……降参するっきゃないでしょーよ」

青々と輝いていた桜の樹も嫌いじゃないけれど。

「でもちよつと時期はずれじゃない？」

「だから証拠になるんだろーが」

夏の炙るような陽射しに燃やされて、花火のように輝き散る桜吹雪には、ちよつとばかり敵わない――！

「よし、そろそろ逃げるぞ霧島」

「は？　なんで？」

「こんなの騒ぎにならねーわけないだろ。人目が集まる前に退避だ退避」

「あんなふうにできるってことは元に戻すことだってできるんでしょ？　じゃあ――」

「えー？　そんなのおまえ、」

「――ああ、やっぱり今のなし今のなし」

「ふふん、だろ？」

につかりと口元に、悪戯小僧みたいに無邪気な笑みを浮かべて新田くん。言いたいことが手に取るように分かり、ちよつと楽しくなってくる。

「あー、そうだね。ってこら、せめて早足くらいにしなさいよ、こんな暑い中走るなんて……ってちつとも暑くないんだった」

「だろ。ほら、ごーごー」

嬉しそくに急かしてくる新田くん。……うん、さっきまでより、こっちのが似合っている。

並んで、駆け出す。

ま、たまには寄り道もいいかなあ。

こんな珍しい時間を放り出すのは、ちよつとばかり――

『もっ
たいない』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807y/>

ばっどらっくぐっどらっく。

2011年11月4日14時06分発行